『椙大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』第三号刊行に寄せて

『椙大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』第三号が刊行されることとなった。この『研究論集』第三号には論文四編と翻訳一編を掲載することができた。今年度も、投稿原稿はいずれも、国際コミュニケーション学部の研究論集にまことにふさわしいものであった。

この研究論集は、二〇〇三年四月の国際コミュニケーション学部開設にあたり、学部開設を記念するとともに、その発展を祈念して創刊したものであるが、当初より、〈言語と表現〉というサブタイトルを付しておいた。国際コミュニケーション学部を導く思想の一端をタイトルに添えたいと考えたからである。学部を導く思想には、〈言語と表現〉の能力の開発・育成を目標とする研究、教育、学修こそが人間にとって最も根本的な第一の実学であり、実学の中の実学であるという思想が含まれている。実学と言えば、通常その代表と目される医学と法学は、いつの時代においても尊重され、多くの人々によりその価値を認められてきたし、現代では、これらの学問以外にも、工学、情報学、経済学、統計学、等々、の実学が、世界中の大学や研究所で花盛りである。しかし少し考えてみればすぐ分かることであるが、何であれ実学が、その実学であることを実証できるのは、結局のところは人間たちが共存する場を措いて他にはないし、したがって実学とは一般に、人間たちの共存する場を切り拓き、深く耕し、その場を守り保持する力に支えられてはじめてその実を証することができる類のものである。そして、まさにこの人間たちが共存する場を拓き耕し保持する力こそが〈言語と表現〉の能力である。それゆえ、〈言語と表現〉の能力とは、人間が生活していくうえで最も根本的な能力であり、〈言語と表現〉の能力の開発・育成を目標とする研究、教育、学修とは、人間にとって第一の実学であり、実学の中の実学であり、生活する力そのものであるとさえ言うことができるのである。この『研究論集』第三号に掲載した投稿原稿はいずれも、右に述べたような学部の趣旨に十分に応えるもので

あった。

なお、今回の論集には、本学部非常勤講師・西牟田祐美子氏の論文を掲載した。内容が学部の研究論集にふさわしいと判断したからである。もともとは英語で執筆された論文であったが、読み手の側の便宜をはかり西牟田氏には、翻訳を依頼した。掲載したのはその日本語訳であるが、著者と翻訳者が同一であるため、これは、翻訳としてではなく、論文として取り扱うことにした。今後も、内容がふさわしいものであるなら、頁数に余裕のあるかぎり、学部の発展に向けて、学部専任教員以外の方々からの投稿原稿の掲載を続けてゆきたいと考えている。

二〇〇六年三月三十一日

国際コミュニケーション学部　学部長　北　岡　崇